

0 理念・目的・教育目標

進捗状況報告

2005年度自己点検・評価で記した「改善の具体的方策」の1について、言語文化学プログラムのカリキュラム改革を行い、2009年度から言語文化学（英語）・言語文化学（フランス語）・言語文化学（ドイツ語）プログラムの3つに再編し、フランス語、ドイツ語による修士論文作成のコースを設置した。

学内第三者評価の評価結果を受けての追加記述

四つの研究領域による横断的・総合的教育カリキュラムの実施については、領域の専門科目にあたる領域研究科目において領域により他領域の科目を4単位あるいは6単位を修了単位に認めている。次年度のカリキュラム改正により言語文化学領域では8単位まで修了単位として認めることになっている。このように他領域の科目を取っても修了単位として認めることは、学生の研究テーマに関連する、あるいは本人の関心が高い他領域の科目を積極的にとり、本研究科で横断的かつ総合的に学ぶインセンティブとなっている。

本研究科の人材養成の具体像として5項目をあげているが、これまでの前期課程修了者の進路先を全体的に分析すると次のようになる。本研究科及び他研究科の後期課程に進学する者も多いが、62%は就職し、さらに55%は教員として学校関係に就職している。このような結果を見ても本研究科でコミュニケーション能力、教育能力等を十分に養成していることが分かる。また、後期課程へ進学し研究者の道を目指す者も多く、毎年のように課程博士の学位を授与しているように研究者養成においても一定の成果をあげている。

前期課程受験生の確保のため、一般広報のみでなく、各担当教員が受験生確保に努めることについては、2007年度にも記載したようにMDS「言語コミュニケーション文化」副専攻の英語セミナー、インデペンデント・スタディを担当している教員を通して履修学生に、年6回ある大阪梅田キャンパスと上ヶ原キャンパスでの入試相談会への案内を配付するなど参加を促している。本研究科委員会においても各所属学部での担当クラスにおいて興味を持つ学生に入試相談会への参加を促すようにアナウンスしている。梅田の入試相談会に参加する学生もいるであろうが、学内での入試相談会に出席する年10人ほどの学生は教員の勧めによって参加した学生が大半であると思われる。今後も色々な方策で受験生の確保に努めていく。

学内第三者評価

それぞれの語種ごとの高度な言語コミュニケーション能力の養成について具体的な進展があったものと認められる。もう一方の各研究領域を横断的・総合的に教育するという目標はどのように進展しているか検証することが望まれる。

2007年度の追加記述において示されている人材養成の具体像がどのように実現されているのか、研究科修了生の進路状況などを含めて自己点検・評価されることが望まれる。

全体を通して、事実の列挙にとどまっており、自己点検・評価活動の趣旨からすると記述内容は十分とはいえない。自身が掲げた目標に向けた活動を行っているのか、活動により掲げた目標がどの程度達成されているのか、活動により浮き彫りになった問題点があるのか、といったことを率直に見直し、Plan-Do-Check-Actionのサイクルをまわしていくことが求められる。

なお、学外委員からは以下の意見があった。

理念、教育目標は、ホームページに丁寧に明示されている。高度言語コミュニケーション能力の養成については、進捗状況報告に記載されているが、その他、前期課程受験生の確保などについては、不明である。